サイ現象とは何か

さきにものべたように、サイ現象は在来の物理学では説明がつかず、さりとて手品でもない現象のことである。しかし、読者の皆さんは実例をもって話さなければわかりにくいとおっしゃるかも知れない。

いま、かりにテーブルの上にスプーンが一個おいてあるとする。だれも手をふれないのにそれが曲がりだしたとしたら、たいていの人は不思議に思うだろう。在来の物理学によると、外力が加わらないのに金属体が曲るなどということはおよそありえないことである。もし、手品師がショウとしてやるのであれば、電気磁気作用を利用して観客の目にわからないように力を加えることができる。種も仕掛もなかったら、手品はできないはずである。しかし、サイ現象は普通の意味での種も仕掛もなくて起るのである。また、必ずしも金属のスプーンが曲がらないとしても、水平な机の上で、香炉が動きだしたとしたら、やはりたいていは不思議だと思うし、専門の物理学者に説明を求めても、ほとんど説明ができないか、ときにはそっぽを向いて取り合わないであろう。しかし、そのような現象は密教の修業過程等で確かに起っているのだから、そこには必ずそれ相当の原理があるはずである。

これらはすべて人間の心理学的原因によって無生物に対する機械的作用という意味でPKと略称されている。Pは心理学的原因、Kは機械的作用を表わす。PKの最も徹底した科学的研究は米国デューク大学の超心理研究所でおこなわれた。私はかれこれ二〇年以上も前の一九五七年二月十八日同研究所を訪れ、所長ライン博士に面会した後、カドレト（Cadoret）博士の案内でPK実験装置をみせてもらった。

デューク大学はノース・カロライナ州ダーラム市の外れに二千八百万平方メートル（約八五万坪）のキャンパスをもった男女共学の総合大学である。キャンパスは東西二つに分れ、西のキャンパスにライン博士を長とする超心理研究所が一九三七年に設立されたのである。私をこの日案内してくれたカドレト博士の説明によると、スウェーデンからこの研究所にきている技術者がPKですばらしい研究を完成したそうである。ここでやっているPK実験というのは、さいころを約二十センチの高さから平板上に機械で落し、中央線のどちらかに静止するように念ずる、というものである。念じている人間は直接さいころに手をふれず、リレー機構で高所から離れるので、偶然であれば、中央線の両側に等確率で静止するはずである。何回も何回も実験した結果、念力の影響はだれにでもあることが統計的に確認された。さきに案内者ののべたすばらしい研究成果の意義について、当時の私には何のことかわからなかった。しかし、あれから二十年も経過した今日になって、米国超心理学会誌に発表された十件以上の論文を丹念に

調べてみた結果、スウェーデン人の技術者とはハーコン・フォアワード（Haakon Forward）のことであり、彼は数万回以上の実験を繰返したことがわかった。さいころの材料も十数種類かえてみた。すばらしい発見というのはさいころを構成する原子の原子核内の中性子が機械的エネルギーに変化するのを突き止めたことである。それが判明したとき、これほどの画期的発見がなぜ大々的に報道されなかったかを考えた。つまり、これはサイ現象を物理学的に説明できる突破口ともなる大発見なのにたいていの人は知らないのだ。もちろん、サイ現象になるべくかかわりあいたくないという在来科学者大多数の気持もある程度了解できる。しかしながら、私が日本PS学会雑誌の三号に詳細を紹介するまで、サイ科学者の間でさえもあまり広く知られていなかったことは誠に不思議なことと思うのである。

人間の心理作用の中で在来の科学で説明のつかない他の側面はESPである。そのまま直訳すると超感覚知覚となるが、簡単に超感覚といっても大差がない。この中にもテレパシー、透視、予知および後知などさまざまな内容をふくんでいる。たとえばテレパシーとは他人の心の動きを知覚することであり、透視は普通の視聴覚で知覚できないような遠くの物あるいは遮蔽された物を知覚することである。よく、日本ではテレパシーと透視と混同して用いられるが、欧米でははっきり区別して使われる術語である。予知は予言ともいわれるように、未来のことを知る感覚であり、後知は過去のことで、常識ではわからぬはずのことを知る感覚である。

テレパシーの例として、出典や年代などは忘れてしまったが、たぶん明治時代の話だったと記憶する。ある剣道の達人が床屋にいって顔を剃ってもらっていた。床屋の主人は心中ひそかに思った。

「こちらは剃刀をもってるんだから、先生の命を預かってるようなもんだ。いくら剣道の先生だからって、こうやって横になってる間はこちらにはかなうまい」

思っただけで、口にだしては言わなかったが、その瞬間大きな声で剣道の達人は

「そうはいかんぞ！」

とどなった。件の主人は虚をつかれ、地べたに手をついて平身低頭謝罪したということである。これは明らかに剣道の達人にテレパシーがあり、床屋の主人にそれがなかった例である。それどころか一般の科学者の大多数はテレパシーなどという現象はあるはずがないと思っている。しかし、禅宗で悟りを開いた高僧になると、ESPもPKも日常の現象であって、超常でも異常でもないと考えている。その上、相手の心中を手にとるように分っていながら何食わぬ顔をしている。

炎天を平凡にくる禅坊主

禅僧だけでなく、精神力のギリギリまで鍛練すると、科学者でも、サイ現象を一般自然現象

の延長にすぎないとみるようになるらしい。元宇宙飛行士エドガー・ミッチェル博士がIEEEの一九七七年春の大会で講演したとき、つぎのようにのべている。

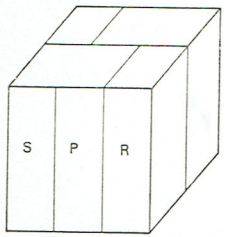
「例外的な超常能力を無視することは社会を進歩させる所以ではない。人間の限りない創造能力や潜在知能を理解することが私の目標である。この世の中に、不自然な現象とか超自然な現象とかいうものはない。すべてが自然な現象である。ただ在来の自然科学者はサイ現象に無知なだけである。われわれはそのギャップを埋めなければならぬ」

わが日本PS学会はそのギャップを埋めようとしておおわらわになっているところである。その日本PS学会では一九七七年の夏八月、台東区かっぱ寺の住持である久我老師から「幽霊に会った話」を拝聴したことがある。この方はなかなか用意周到な方で、すぐに幽霊の話をなさらない。つまり、一般科学者は幽霊の存在を信じないことを御承知だから、まずESPの話をし、幽霊の存在を認める超感覚を理解させようと努力された。しかし、久我老師は曹洞宗の高僧であるから、ESPを曹洞宗の用語で表現された。以下に対応するESP用語を書いてみた。

一、天眼通……透視、千里眼
二、天耳通……千里耳（地獄耳）
三、他心通……テレパシー
四、宿命通……予知、後知
五、神足通……テレポート
六、漏尽通……悟りの境地

これらの仏教用語は道元禅師著作の『正法眼蔵』第三十五巻では六神通として総称されていて、相当修業をつめば必ずこの程度の能力が具わるものだと説いている。だから、これらをけっして不自然な現象と考えてはならないし、またこれを安直に自分の欲望をみたす方便と考えてはならないと戒めている。心を正すことによって、自然に副次的に発現するのであって、この能力を身につける目的で修業するものではないとも教えている。なお、幽霊の詳細、悟りの意義および倫理・道徳とサイ現象との関係については、後で項を改めてのべることにしよう。

修業をつみサイ現象を体験したことのある宗教家は他のサイ現象についても理解が早い。第1図［★］のように、宗教Rと科学Sとの間にギャップがある。わがサイ科学Pはそのギャップを埋める使命をもっている。宗教家にサイ現象の理解の早い人々の多いのは、宗教における戒律、儀式、祈り……などにともない、必ずサイ現象を付随するからである。一方、在来科学はサイ現象を除外した自然現象を科学的方法で研究してきた。そこでサイ科学では、サイ現象もまた自然現象のうちであると考え、やはり科学的方法でその真相に迫ろうとしているのである。そのことの是非は議論の余地もあろうが、われわれはこの方針を正しいと考えている。サ



1図

イ科学が確立されたとき、現在いろいろな面で行詰っている困難を打開し、人類は互いに親しみ愛し、平和は自然に招来されると信ずるからである。

最近になってオルゴーン・エネルギーを発見したウィルヘルム・ライヒ（一八九七―一九五七）の価値がようやく認められかけている。彼の偉大な発見は子供の頃、光が旋回しながら進むと直感したことから出発したもののようである。彼は、一般の教育者から教えられた「純粋に主観的なものは現実に存在しない」とする主張に反駁している。なるほど客観的方法で観測されたものは現実に存在するのは確かだが、それは死んだ科学だと彼は主張する。科学的客観性を固執するあまり、その表現から生きているものを殺している。その結果、生命は機械的・唯物的イメージに映り、最も本質的なものを見失ってしまっている。ヨガや密教などといった類のあらゆる神秘主義はすべて主観的器官の感覚に基礎をおいている。神秘主義は自然科学が拒否し、軽べつするところの力や過程の存在を主張する。ひるがえって、少しよく考えてみたら、「人間の感覚は器官の中にある唯一の客観的自然の過程だから、何らかの形で現実に客観的に存在しないものを感じたり、直感像化したりできないはずだ」ということがわかるだろう。ライヒはこのようにして、少年時代に抱いた直感――それは目をつぶったときにみえてくる光の旋回直進――から、いまだに謎の多いオルゴーン・エネルギーを発見し、ある種の病気治療に成功しているのである。

ライヒの研究は一九四〇年から四五年にかけて活発に展開したが、彼の教育をうけたアレキサンダー・ローウェン博士は一九四五年から五三年にかけて、さらに発展させ、生物エネルギー学（バイオエナージェティクス）による病気治療に成功している。

さきに御紹介したライヒの主張によって裏づけられると私は信じる者であるが、釈尊の悟りはサイ現象の極致ではあるまいか。そこに科学が根をおろしたとき、在来の自然科学から脱皮した未来の科学が芽をだすはずである。こうのべると、必ず「あれは仏教という宗教であって、科学ではない」との反駁がきこえてくるのだが、この書物を書き終るまで、くどくどと反論をしないことにする。

私が原稿をここまで書いてきたとき、たまたま米国アリゾナ州に旅行し、本会瓜谷監事の御忠告に従って、ARE診療所にマクギャリー博士を尋ねた。ここは有名なエドガー・ケーシー（一八七七―一九四五）の生存中に口述した医療知識を忠実に実行してすでに二万人もの患者を治療した実績をもっている所である。その医療知識はエドガー・ケーシーが過去に学習したものでもないし、また、西洋医学で過去の経験や研究を積上げたものとも異るものである。彼がトランスの状態での口述の記録であり、彼自身、覚醒してから何を喋ったか知らない内容のものである。しかも、その知識をもとにして、このように多くの患者を治療した実績があるのに、これを科学といわずに、幻覚といえるだろうか。あるいはAREで「聖なる治癒」というよう

に、これを宗教というのであろうか。そう単純に物事を考えてはいけない。

ライヒのいうように、何らかの形で客観的に存在しないものを感じたり、直感像化したりすることはできないはずである。それはサイ現象であり、それを追求するのがサイ科学である。

サイ情報系の仮説

サイ現象はそうしばしばは起らない。起ったとしてもその原因になるものが目にみえないし、わからない。よくわからないから、サイ現象の再現性が小さい。まったくないわけでないが、ひじょうに小さい。それはなぜであろうか。

前項のケーシーロ述はほんの一例にすぎないが、あのように適格な医学知識を自由に駆使できるということは、よほど優秀な、高級な、そして大量の蓄積能力をもった情報系が彼の背後に存在しなければならないことを示唆する。

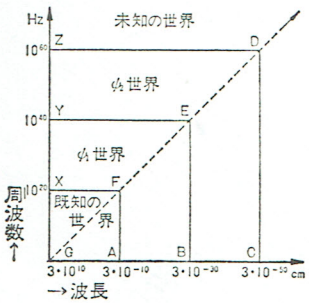
サイ現象の原因になるものの正体がわからないのには、いろいろな理由が考えられる。ここでは簡単のため二つだけにとどめよう。一つは虚数座標軸の現象だから目にみえないという品川理論であり、他の一つはひじょうに小さい素粒子で構成されているからだとするサイ情報系理論である。ここでは後者についてある程度まで掘下げて考えてみたいのであるが、その前に虚数座標軸のことを簡単に紹介しておこう。これは約二十年ばかり前に本会会員の品川次郎氏の独創にもとずくものであるが最近になってその詳細を『サイ科学』第一巻第三号に発表しているので、興味のある方は一読をおすすめする。まず、現実の世界は立体を表わす三つの座標軸と時間を表わす一つの座標軸の範囲で説明できる四次元の世界である。それはすべて光を媒介にしてわれわれの感覚に到達する。光が空間を伝わる様子はマクスウェルの方程式で表わされるが、その式をじっと睨んでいると、表現に片手落が見出される。その片手落を補うものが虚数座標軸で表現された四次元世界であり、実数座標軸の四次元世界と合せて一人前の人間のように右手と左手の両方を具えたことになる。かりに現実の世界を実数の四次元世界とよぶならば、これは虚数の四次元世界である。サイ現象は虚数の四次元世界と実数の四次元世界との干渉によって現われる。われわれの五感は実数の四次元世界だけを認識するが、第六感は虚数の四次元世界に関係をもつ。ようするに、実数の四次元世界と虚数の四次元世界を総合した八次元の世界を考慮しなければ、すべての自然現象を完全に説明することはできない。しかるにたいていの場合、実数の四次元世界しか認めていないから、不可思議とか、奇蹟とか、超常とかいう言葉を使わなければならないようになる。つまり、大多数の人々は片輪の常識で生活しているということもできる。もし、自然科学者の大部分の方々が八次元の世界を考える時代がくれば、すべての現象が自然であり、正常であり、当然のこととして理解できるようになるはず

である。

サイ現象の原因になるものの正体がみえない理由を説明するもう一つの方法は、構成単位が小さいということである。この考え方は初歩的で単純なようでもあるが、どの程度小さいかとか、どのような構造になってるかとか、どんな機能があるかとか、あるいはそれらが現実の世界に影響する原理はどうか、といった諸問題を考えるとなかなか大変な仕事になってくる。しかし、ある程度概念的に考えることはできる。

ごく常識的に考えて、一センチメートル（以下簡単にセンチという）という寸法は実に身近なものである。老眼でも近眼でも、一センチ角の字なら肉眼でも読める。これを規準にして考えると、われわれ大多数の地球人は、かりに人工衛星の飛んでる範囲の球を考えても、せいぜい百億センチの大きさにすぎない。一方、万物を構成していると考えられる素粒子の寸法はというと、大雑把にいって百億分の一センチの程度である。もちろん厳密なことをいうと、電子の寸法はこれより約二桁ばかり小さいが、それだって、間接にしかわからない漠然とした値である。また、中性微子などという素粒子は、これよりはるかに小さく、質量もゼロといわれている特殊なものだから特別扱いにしておく。ようするに、百億という数字は十桁に相当するから、われわれは大きい方に十桁、小さい方に十桁、合せて二十桁の世界に住んでいるわけである。これをもっと簡潔な表現でいうと、大きい方は10^{10}センチ、小さい方が10^{-10}センチ、両極端の開きは10^{20}程度ということができる。第2図[★]の横軸の左三分の一がそれを示している。ただ係数がついてる点が気がかりかも知れない。しかし、この範囲に相当する縦軸の部分をみると、10^{0}（これは1と同じことである）から10^{20}までとなっている。実は、このグラフは電磁波の波長と周波数との関係を示すものであって、この範囲はヘルツの単位で示した周波数の範囲を表わしているのである。これに対して、先に示した3を係数にした10^{10}センチと、同じく10^{-10}センチとはそれぞれの周波数に対応した電磁波の波長を表わしているわけで、われわれは現実にこの範囲で日常生活を送っているのである。これに対して、サイ現象はだいたいにおいて周波数では10^{20}ヘルツ以上、波長では10^{-20}センチ以下の世界で起るものと仮定する。そうすると、素粒子、原子、分子、結晶、生物あるいは無生物をはじめ、諸物体は寸法において概略この範囲内に納まるはずである。ここで「概略」とことわったわけは、10^{-10}センチとか10^{10}センチのような限界の部分を考えてのことである。前にのべたように、素粒子の寸法は必ずしも10^{-10}センチと限らないし、地球圏といっても、人工衛星や月までの距離は10^{10}センチを超えている。そこはきわめて漠然としたことを言ってるのだとご了解願いたい。

さて、われわれの現実世界が10^{-10}センチ付近の素粒子群で構成されていると同様に、第一サイ世界（第2図ではΨ_1世界と書いてある）では、10^{-30}センチ付近の第一サイ粒子群（簡潔にはΨ_1粒子群と表示する）で構成されていると考える。これだと、われわれの肉眼ではもちろん見えない



2図——三層構造の世界

し、電子顕微鏡その他の科学的観測器械でも、直接観察できないわけである。それでは現実世界と第一サイ世界とはまったく干渉がないのかというと、そうではなく周波数の変換その他の手段で相互に情報交換は可能である。とくに、第一サイ世界よりみれば、現実世界の情報をえやすいであろうことは、常識でも想像ができる。ただその逆はあまり容易ではない。もし、現実世界と第一サイ世界との干渉がまったくないものならば、第一サイ世界を仮定すること自体がまったく無意味なものとなる。もし、第一サイ世界を仮定することが有意義であるとすれば、その世界での情報は想像を絶する巨大なものであろうし、通信能力も強大なものであろう。つまり、われわれの世界が原子や分子で情報系を形成していると類推的に、第一サイ世界では第一サイ粒子群の複雑な組合せで情報系を構成していると考えなければなるまい。これを私の命名で第一サイ情報系と呼ぶ。よく知られているように、人間の大脳は10^{10}個程度の神経細胞をもっているので、すくなくとも10^{10}ビット[★]位の情報量を記憶できるといわれている。

しかし、人間の頭脳の視床下部松果腺の付近には第一サイ情報系が存在するものと想像される。これは、すくなくとも10^{18}ビット位の情報量をもつらしい。いまは序論の段階であるから、その根拠をのべる段階ではないが、私は第一サイ情報系の最高情報量を10^{28}ビット位と踏んでいる。

第2図の第二サイ世界（Ψ_2世界）について考えてみよう。第一サイ世界の場合と類推的に、

★――ビットというのは情報量の単位で、二者択一を一回すると一ビットの情報を得たという。（詳細は情報科学の書物にゆずる）

第二サイ世界では第二サイ粒子群の複雑な組合せで第二サイ情報系を構成していると考える。第二サイ粒子群は、第2図より分るように、10^{-5}センチ付近の大きさをもち、それが第二サイ情報系をつくると、すくなくとも10^{45}ビットより10^{60}ビット位の情報量をもつのではないかと信じている。それ以上は神の領域になるので、巨大であるとしか定量的表現のしようがない。

サイ科学にはじまる

サイ科学というときのサイは Psi と綴る。サイコロジーのサイは Psy――である。そこにiとyの違いがあることを念頭におかねばならない。サイ科学という場合のサイはギリシャ文字のΨ（サイ）という意味である。ギリシャ語のアルファベットはご承知のように二十四文字から成立っているが、Ψはその二十三番目の文字に当る。これを「プシー」とか「プサイ」と読む人もあるが、「サイ」と読んだ方がよい。心理学（Psychology）のことを「サイコロジー」と読むが、「プサイコロジー」とは言わないようなものである。

実はサイ(Ψ)を超感覚や念力やその他多くの超常現象の根源とし、現実の世界への現われを超常現象と命名するように、最初に提案したのは、近代超心理学の父といわれるJ・B・ライン博士（一八九五――）であった。彼の夫人L・E・ラインとは十五歳位からの知己で、大学の心

超心理学
- ESP
  - 透視
  - テレパシー
  - 予知
- PK
  - PK—MT
  - PK—LT
  - PK—ST

彼はデューク大学における心理学科と無用の摩擦を避けるために、超心理学（Para psychology）という新語を考え、超心理学研究所を在来の心理学科とは別組織とし、彼自身は両方の兼務として学長からも好意をもって待遇された。彼が近代超心理学の父と仰がれるに至ったのは右のような経緯によるものだが、彼自身はESPやPKの背後に何か一貫したものがあると確信するようになった。それに前記のサイを適用したわけである。しかし、そこには魂（soul）を意味するギリシャ語の頭文字がΨであるという語源を暗に心中に描いているわけで、彼の研究発端の動機となった霊魂不滅思想がちらついていることは否めない。

さて、いよいよここでサイ科学に関して筆者の見解を述べる段階に達した。なるほどラインはESPとPKをサイ現象と呼び、その背後にサイ因子があると主張した。しかし、超心理学だけがサイ科学の全貌といってしまってもよいだろうか？　さきに超心理学の分類にESPとPKをあげ、それぞれをさらに三種に細分した。その一つ一つを検討してみると、すべて、生きた人間の心に感じ、生きた人間の心に原因する現象に限定される。たとえば念写（Nen graphy or Thoughto graphy）というのは、霊媒あるいは特殊能力者の心に念じたものが写真フィルムに感光するものであるから、PK—STに属する現象であるが、霊写真（Spirit photography or Scot-graphy）というのは、だれも念じないのに故人の写真などが現われるものであるから、前記PKの範疇にも入らないし、厳密にいえば、超心理学の領域でもあつかえないことになる。しかも、これはあくまでサイ現象と仮定してもよかろう。霊写真でも、普通の記念写真をとるつもりで沖縄のひめゆりの塔の前で写すと、現場に存在しなかったはずの人物が参加することがあるかと思うと、未感光の写真乾板をカメラに入れないで、写ることもある。

その他に考えてみると、厳密にいって超心理現象に属しないものの方がむしろ多い位である。ボイスレコード、浮遊光球のような物理的効果に属するものと、生物学的元素変換（BTA）、憑依、再生等のような生物的効果に属するものとは、前記の表と別に項目を設けなければならないものの例である。だいたい、後者のような例は昔から心霊科学(Psychic Science)としてあつかってきたもので、ずいぶん古い歴史をもっている。たとえば、英国で心霊研究協会（SPR）が設立されたのは一八八二年二月二十日のことであり、米国でアメリカ心霊研究学会（ASPR）が創立されたのは一八八五年のことである。日本で福来友吉博士が念写現象を発見したのは一九一〇年のことであるが、日本心霊科学協会が設立されたのは一九四六年であり、それ

が一九四九年に財団法人となった。福来博士が和文で『透視と念写』を著したのは一九一三年のことであったが、英文著書 *"Clairvoyance and Thoughtography"* をロンドンで発行したのは一九三一年のことである。私が一九五七年、デューク大学にライン教授を訪れたとき、書棚から福来博士の著書をさっと抜き出して示してくれたのは印象的であった。もし、福来博士が念写現象を発見した当時、ライン教授に対するデューク大学学長のような温かい心と、大学の環境に恵まれていたならば、日本における心霊科学の研究事情は一変していたことであろう。

さて、過ぎ去った無用の繰り言はとにかくとして、前記の超心理現象にしても、心霊科学現象にしても、サイ現象であることに変りがないとみるべきであろう。もし、そういうことであれば、自分は心霊科学の専門だとか、自分は超心理学の専門だとかいって、それぞれの領域に立て籠っていたのではサイ現象の本質をつかむことはむずかしいのではあるまいか？

もちろん、人情として科学者は比較的超心理学を受容しやすく、宗教家は比較的心霊科学に接近しやすい傾向はあるようである。しかし、それにこだわってはならない。そのような趣旨で日本ＰＳ学会は一九七六年に創立された。ここにＰＳはサイ科学（Psi Science）の意味である。だから、人によっては幅が広すぎると批判するかもしれないし、もっと的を絞るべきだという主張も当然でるわけである。

前記ライン教授の場合には科学者の批判に耐えるため、必要以上に実験条件を厳密に設定し、そのため、研究が大幅に遅れたと述懐している。彼はどちらかといえば科学者偏りの研究方針であったから、超心理学と占星術、数秘学、手相術、オーラ視あるいは新旧ＵＦＯ研究とは論理的に相容れないものがある、とのべている。また一方で、数秘学や手相術の技法は無意味であるか、との質問に答えて、「ノー」といい切るのは非科学的であって、答をもっと先にのばすべきだともいっている。彼は、超心理学の基礎を確立し、一応の任務を終り、一九六五年に大学の定年退職とともに、一九六二年設立した人間性研究財団（FRNM＝The Foundation for Research on the Nature of Man）に所属し、サイ研究をずっと続けていくと宣言している。

現在アメリカにおけるサイ科学研究の第一人者はスタンリー・クリップナー博士に移った感じであるが、ウィスコンシン大学を卒業間近に控えた一九五三年にライン教授を講演者として招いた頃より師弟の関係が始まった。クリップナーは翌年同大学を卒業後、他の大学で修士や博士課程を終え、デューク大学の超心理研究所でも研究協力をした。しかし、何といっても、彼のライフ・ワークともいうべきものに、一九六四年以降約十年間にわたる夢テレパシーの研究がある。これはブルックリンにあるマイモニディーズ医療センターのマーフィとウルマン両博士の要請によって新設の夢研究所長としてクリップナーが迎えられたからであった。彼は数々の業績をあげ後任のチャールズ・ホノートンに職を譲り、一九七五年の初頭サンフランシス

コに引越し、つくづく述懐した。その中で、彼の夢研究所の十年間は自分にとって必要以上のよい経験であった。これからは超心理学の実験には一切手をだすまい、その代り、教育と執筆活動によって心霊科学の促進に貢献しよう、とのべている。これは私の心境と似たものがある。そのせいか、一九七七年九月十九日、彼のサンフランシスコ事務所で面会した際も、何となく親近感をおぼえたものである。一九七七年十月号のリーダーズ・ダイジェスト誌にはライル・E・バートレットという人が「心霊現象はどこまで解明されたか」と題する記事を書いている。この記事の冒頭にクリップナーの言葉をつぎのように引用している。

「ブルックリンにあるマイモニディーズ医療センターで、われわれが十年来おこなってきたESPと夢の研究では、心霊現象に肯定的であるとを否定的であるとを問わず、すべての結果を公表してきている。超心理学者は長い間科学界からつまはじきされていたが、その傾向は変りつつある。近年、実験の方法が進歩したからだ」と。

一方、クリップナーの内心はこうだ。過去十年間の超心理研究によって、宇宙には未知のサイ現象がたくさんあるという見透しをえた。今後、自分としてはその全貌をつかみ、後進の指導を誤りなくやりたい。実験をやってると、狭い範囲に捉われて全貌がつかめなくなる。実験は若い人々に任せ、自分は大局をつかみ、彼らを正しく指導する責任がある。そんなふうに考えているらしい。

アメリカの大学では超心理学の課程を採り入れる所が年々増加している。一九七八年には大学教科書として『サイ科学』という書物がチャールズ・C・トーマス出版社より発刊されている。これはセント・ジョセフ大学教授キャロル・B・ナッシュ博士(Dr. Carrol B. Nash)の著作になる約三〇〇ページの本である。内容梗概はPS学会月報四十六号に紹介した。

ようするに、サイ科学は超心理学も心霊科学も包含し、ほとんどすべての超常現象を取扱う学問の領域ということができる。前記のサイ科学教科書には一応サイの定義がのべられているが、サイ現象そのものが解明の途中段階であるところから、明確な定義を下すことは困難である。本書をひととおり読んでいただければ、ほぼ輪郭がつかめるものと思う。

分類法の手がかり

私はサイ現象をいい加減に分類していた頃、ある人から催眠術はどこに入るか、ときかれてはたと当惑した経験がある。あれからよくよく考えてみると、催眠術はサイ現象を誘発するテクニックにすぎないことが分ってきた。そう考えると、サイ現象の分類表は54ページの第一表に示すように割合すっきりしたものになった。旧表には倫理実践や祈り等が列挙されていたが、今度の表ではそれらを括弧の中に入れた。サイ現象を誘発するテクニックとして考えられるも

1表——サイ現象の新分類表(A New Classification Table of Psi Phenomena)

Ψ→D (1)物理的 Physical	11振動現象 vibration	111	叩音(raps), 音声(voice)
		112	冷・温・熱・発火(cool,warm,heat,ignition)
	12放射現象 radiation	121	aura,Kirlian photography
		122	霊写真(Scotograph)
		123	浮遊光球(ball lightning)
		124	半客観的幽霊(semi-objective ghost)
	13動力現象 power	131	物品浮揚(levitation), 杖占い(dowsing)
		132	EMA motor, psychotronic generator
	14物質化 materialization	141	天地創造(GENESIS)
		142	客観的幽霊(ectoplasm), 蝋の手袋(wax groves)
		143	神隠し（ある場所で消え，他の場所で現れる）
		144	金粉降下(golden dust falling)
Ψ→B,C (2)生物的 Biological	21物質変化 transmutation	211	生命の誕生(birth of life)
		212	進化(evolution)
		213	生物学的元素変換(BTA)
	22体重変化 weight change	221	降霊会出席者の体重減
		222	生より死に移行の際の体重減
	23生命力変化 vitality change	231	洗心・倫理実践による無病息災
		232	憑依による病気(disease by obsession)
		233	耐火(fire walking, etc.)
	24輪　廻 metempsychosis	241	転生自覚(age regression( )
		242	痣・奇形など証拠の印
		243	幽体離脱(out-of-body experience)
Ψ↔A (3)心理的 Psychological	Ψ⇄A 31サイ情報 psi information	311	天啓(revelation)
		312	autosuggestion（私語依存）
		313	憑依(automatic writing, glossolalia,　多重人格)
		314	主観的幽霊(subjective ghost)
		315	biofeedback（計器依存）
	A↔Ψ↔B,C,D 32ESP	321	telepathy（覚醒時；夢）
		322	precognition（純心理的；器物依存）
		323	clairvoyance（天眼通；天耳通）
		324	retrocognition（宿命通，クロワゼトの例）
	A↔Ψ↔B,C,D 33P K	331	energy
		3311	無生物(PK-MT;PK-ST)
		3312	生　物(PK-LT;healing)
		332	information
		3321	無生物（念写；念描）
		3322	生　物（暗示；Backster効果）

のは、催眠術の他にヨガ、超越瞑想、坐禅、暗示、倫理実践、祈り、洗心などがある。また、サイ現象といえるかどうか分らないが、とくに病気治療のため、鍼灸、安静、除霊などがおこなわれる。

それからUFOを一時この表の中に入れようと試みたことがあった。そうすると、一個所だけではすまず、何個所にも挿入する必要が起こって際限がなくなった。これもよくよく考えてみると、サイ現象を発生する環境にすぎないことが分かってきた。そこには121や132や331のような数多くのサイ現象が発生しているはずである。もちろん、UFOの中には在来科学の範疇に入る現象も発生しているはずだが、UFOそのものが在来科学で未確認である以上、大半がサイ現象と想像するほかはない。

元宇宙飛行士エドガー・ミッチェルはつぎのように語っている。

「この世には不自然な現象とか超自然現象といったものはない。すべてが自然現象である」

私もこの意見には全面的に賛成するのだが、万人がこの意見に同意するのは、在来科学とサイ科学との区別がつかないほど融合した未来であろう。UFOを在来科学が承認しない現在はなかなかそこまで到ってないと思う。同様のことがピラミッドについても言えよう。在来科学よりみれば、ピラミッドは単に二等辺三角形が四つと正方形の面に囲まれた幾何学的立体にすぎない。しかし、サイ科学の立場でみると、これはプラナの集散する立体構造であって、U

FO母船の目標ともなっている。また、ピラミッドの小さな模型は剃刀の刃の再生や食物の保存にも実用される。それらは、プラナに関する科学・技術が確立すれば、当然これを超自然現象としてでなく、自然現象として認めることができると期待するのである。だが、現在のところ、UFOもピラミッドもサイ現象の発生する環境として扱うから、これらを前記の分類表の中に入れることをしなかったのである。その他にもサイ現象発生の環境とみなされる場所やものが考えられよう。とくに、宗教や心霊科学の分野にそのようなものが多いようである。

この分類表をみていると、いろいろとおもしろいことが分ってくる。古くから研究されてきた心霊科学は主として(1)と(2)であり、比較的近年に発展した超心理学は主として(3)である。また、ソ連圏で提案したサイコトロニクス(Psychotronics)は主として121や331を掘り下げようというものである。これは国際会議で審議されたサイコトロニクスの定義をみても頷かれる。それは「サイコトロニクスは、人間とその環境の内的・外的相互作用ならびに、そこに関与するエネルギーの過程という分野について、学術的な方法で研究する一科学である。サイコトロニクスは物質、エネルギーおよび意識が相関することを認める。この相関の研究は、過程や物質と同様に人間のエネルギー的能力に関与していることを新たに理解するのに役立つであろう」としている。

しかし、実際に会議で発表された論文をみると、決して121や331の関係にとどまらず、心霊科学や超心理学の領域に含まれるべきものも多数ある。ようするに、ソ連圏では名称にこだわっているようにみえる。それは唯物論の国であるから、霊魂や神に関係するような現象をあつかうと、彼らの国内の新聞などで学界の権威者による非難が集中するからである。この分類表でみる限り、前記の定義どおりとすれば、サイコトロニクスの研究領域は最も狭く、これでは真のサイ現象をつかむ可能性は小さいように思われる。

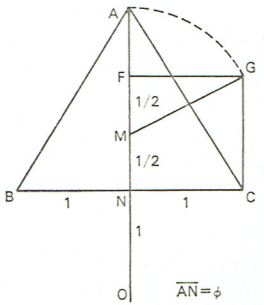
また、(3)は超心理学の領域を表わすのであるが、デューク大学のライン博士は31を除外していたような気がする。また、PKについての彼の分類も331に限定される。ようするにESPとPKは心理的なサイ現象のすべてを表わしてはいないことが明らかである。なぜなら、ESPとPKはあくまで人と人、人と物あるいは人と一般生物の間に起る現象に関係しているからである。しかし、表にも併記したように、たとえば人と人の間にサイ現象が起るのは、必ず中間のサイ情報系(Ψ)を媒介にしていることを念頭におかなければならないのである。そして、そのサイ情報系はサイコトロニクス学者の主張するように、けっして生物固有のものだけではないのである。サイコトロニクス学者はサイ情報系とは言わず、生物に固有のサイエネルギーと称し、すべてのサイ現象を生物に固有のものと考えているようである。この思想は在来の唯物論からまだ脱却していないものである。しかし、サイ情報系には生物固有のものもあるが、そうでないものも存在しなければならない多くの証拠がある。生物固有でないサイ情報系

の中には、固有のものよりはるかに進化したものがあると考えなければならない。

311の天啓は右の思想から設けられた項目であると同時に、天啓というれっきとした事実があるからこそ、右の思想が生まれてくる次第である。そして、31の項目は特定の人間とサイ情報系の間に起るサイ現象であって、サイ科学の中で最も大切な項目の一つでもある。この場合、一般にサイ情報系の中には各人に固有のもの、非固有のもの、あるいは低級のもの高級のものがある。311は高級で非固有のサイ情報系に関する現象といえよう。たとえばエジソンの大発明、スタインメッツの大発見、あるいはエドガー・ケーシーの医療法指示の中には天啓としか考えられないものがある。

さて、一度非固有のサイ情報系が存在するとの認識にたてば、分類表の(1)や(2)は自然に了解できる。たとえば、だれも意図しないのに振動、放射、動力および物質化といったサイ現象が起るのは、サイ情報系の意図によるものである。サイ情報系について無知であった頃は超常現象であったかも知れないが、サイ情報系を仮定すれば、それは自然現象にすぎないことになる。

また、物質、体重および体力の変化や輪廻のような現象も、サイ情報系によるものであることが分ってみれば、すこしも不思議とするにたらない。



4図――定規とコンパスで斜面三角形を描く

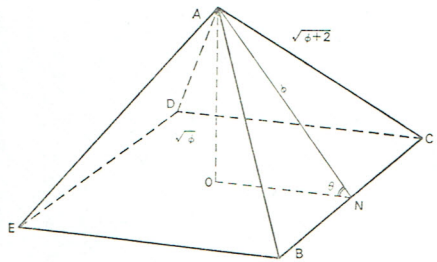
そうは言っても、サイ現象の機構はまだまだ分らないことが多い。今後の研究によってだんだんそれらが解明されれば、この表もまた改正しなければならなくなるだろう。しかし、一方において、このような表を作っておけば、今後のサイ現象研究に役立つであろうことも期待できる。私は最初の表を作ってから約十年を経過し、その間、何度も何度も改正してここまできた次第である。

まず手はじめの実験法

最も手近なところで、いつでも誰でもできるサイ現象の実験はピラミッドであろう。

ピラミッドは古くから知られ、わかりきったような立体構造だが、中には案外ご存知ない方もあるので、簡単に定規とコンパスだけで作図する方法をご紹介しよう。つまり、数字をあまりいじらないので、物差しすら不要の方法である。数字はでき上がってからのべることにしよう。

まず、ピラミッドの斜面の二等辺三角形を描ければ、あとはその底辺を一辺とする正方形を作るのは容易である。第4図「★」の二等辺三角形の底辺をBCとする。BCの中点Nから垂線NAを立てる。正方形NCGFを描く。FNの中点MとGを直線で結ぶ。Mを中心とし、MG



5図――でき上りピラミッドの斜面と水平面とのなす $\angle\varphi=51°49'38''$